コ ラ ム

2006/07（3）

　こんにちは。副園長の佐藤です。今月は「お襁褓」について書きたいと思います。読み方は「オムツ」です。漢字変換でいきなりこれが出てきた時は、流石に面食らいました。強いて保つのがオムツなのかと…。

「自然に」はずれる？

　考え方の一つは「自然にはずれる」というものです。小学校へ行ってもオムツをしている子はいないんだから、成長していけば特に働きかけなくても大丈夫。本人が嫌になったらやめるでしょう、です。

　実際、そのような考え方でお子さんと接してきた方のお話も伺いました。でも私としては賛成できかねます。今のオムツは結構快適なのです。もちろん、「小学校へ行ってもオムツをしている」子はいないでしょう。しかし、「じゃあ幼稚園卒園まではいいんじゃない？」というのは余りにも…。さらに、**「オムツをつける」ことが体に備わった自然な成長過程ではなく、大人の事情によるもの**なのですから、その卒業にも大人は関わらなくてはいけないと思うのです。

「トレーニングしなきゃ！」

　２つ目は、「トイレトレーニング」をする、というもの。「わが子も赤ちゃんから卒業ね」ということを親子共に実感します。そして、「２歳児の夏」にそれを実施するケースが多いと聞きます。子どもの側の準備として、体内の神経が発達し、「出たよ」「出そうだよ」「まだ待って」など、**脳みそと末端の連絡がしっかりできるようになっていないと「トイレで排泄」は難しい**のですが、それが出来てくるのが２才から３才辺りなのだそうです。喋れるようになってはいても、体のセンサーが十分に働いていない時期では、「おしっこ、出る？」と訊かれても的確な答えが出来ないのは当たり前です。「溜まっている」と感じられないのですから。

　我が家は、ここでハマりました。長女は１才１０ヶ月でオムツが取れたのですが、パンツを穿き始めた頃、赤坂の雑貨店で失敗してしまいました。大人も大あわてでしたが、本人は**「気に入ったキティちゃんのパンツが…」というショックが大きかった**ようで、それからは自分なりに気にするように

なっていき、暫くしてトイレを教えてくれるようになりました。

　長男はその時期（２才前）、まだセンサーが働いてなかったのですね。「無いって言ったじゃない！」ということを何度も何度も繰り返して、**「トレーニングパンツ」の不快感をかなり（約１ヶ月）経験し**、結局２才の夏、２才６ヶ月の時に外れました。結局、子**ども側に何らかの動機付け（嫌な思いはしたくない）が必要**なのだろうというのが我が家の経験です。

コミュニケーションとして捉える

　あまりメジャーではないようですが、「子どもとのコミュニケーションの内容」として排泄を考える側面もあります。子どもが出すサインは、言葉だけではありません。育児マンガを読んでいると、「モジモジする」「部屋の隅に行く」「カーテンをつかむ」など、ユーモラスなサインが沢山出てきます。それぞれ子ども達が、半ば無意識に行っていることでしょうが、**お母さんがそれをサインと気づいて適切に返していくことで、「分かってくれた」という安心感と信頼関係を作っていく**方に、むしろ主眼をおいた考えです。**「トイレでする方が気持ちいい！」**というのは「早いか遅いか」より一歩本質的だと感じています。子どもが、他人の誰でもなく自分の中に起きていることを表現し、周りが適切に扱ってあげることで、良い結果が得られる。その一連の行動に「おしっこ、行きたい」という名前を付けてあげるのが親の役目として先決だろうと思います。

入園後の展望

　入園が間近になると、関連質問が出ます。「取れていないと入園できませんか？」「しているままの子は、どのように扱われますか？」「何人くらいいますか？」など。現在は、昭和３０年代の子どもに比べ、半年以上は「外れ」が遅くなっています。当然４月の時点でそのままのお子さんもいらっしゃいます。大よそのステップは解明されているのですから、お母さんの観察眼と理屈、多くの人の経験を参考にしていけば、きっと子どもも大きく変わってゆくきっかけになると思います。

参考；アメリカ小児科学会のチェックポイント
①親のまねをする　②物を決まった場所に置ける　③自分の意志で「NO」が言える　④トイレに関心を持つ　⑤一人で歩いたりおすわりできる　⑥尿意

を伝えられる　⑦自分でパンツやズボンを降ろせる